

アーティスト・田中和人と菅かおるが運営するアーティストランスペース「soda」の企画として、2014年・2016年・2020年と開催されてきた「New Intimacies / ニュー・インティマシー」の4回目となる展覧会を開催します。

「New Intimacies」は、プライベートにおいてパートナーの関係にあるアーティスト(あるいはアートに何らかの関わりを持つ者)のカップルが、それぞれ協働・共同により制作した作品を展示するもので、これまでに様々なカップルが参加してきたが、おもに関東圏のアーティストが中心であったこれまでにに対し、本展は「-WILD WILD WEST-」として関西以西に在住・活動する7組・14名のアーティストによって構成しています。

「個」を起点とするアーティストにおいて、作品・表現はアーティスト個人の発想・思考のみの産物ではなく、個を取り巻く様々な関係・影響を受けて創造・醸成されたものであるといえます。その複雑で多様な関係性を作品に明確に見出すことは難しいものですが、しかしおよそ表現や作品に至る背景として普遍的に存在しているといえます。

本展は、アーティストにおける多様な関係性のひとつの極として、プライベートにおいてパートナーであるアーティストのカップルに共同制作を依頼します。そして、ここに『親密さ(インティマシー)』という言葉を立てて作品や表現を眼差すことで、アーティストやクリエイションにおける、多様な関係性・在り方をも眼差してみるものです。

目的やコンセプトを共有してみるもの、制作プロセスを共有してみるもの。制作プロセスを共有することによって互いのイメージの共有を図るもの、あるいはその違いをあらわすもの。テクノロジーやインフラなどの進化により、コミュニケーションのあり方だけでなく、表現媒体や方法、あるいは「表現」そのものの定義も複雑化・多様化する現在にあって、展示された作品に垣間見ることのできる「親密さ」もまた、より多様で複雑なものと思えるかもしれません。しかしまた、そこにはもとよりの親密さに由来するものとは異なり、私たちが当然に違うものだからこそ、その違い(あるいは共有できうるもの)を「知ろうとする」行為の結果が示されているともいえるでしょう。

「個」を単位とする表現活動において、内在・外在する様々な関係性を一旦はプライベートの「親密さ」に代入し、その回路を経て制作した作品からは、それぞれの関係性や影響関係を見出すことができると同時に、「個」と「個」が自らを知ろうとする、相手を知ろうとする、私たちにとっても当たり前の「親密さ」を見出すことができるのではないのでしょうか。

# NEW INTIMACIES WILD WILD WEST

2022 9.11 - 9.25

Soda + Gallery PARC

Atsuchi Tomoko (artist) + Yamashita Kohei (artist)  
**厚地 朋子 + 山下 耕平**

Imamura Tatsunori (dancer) + Hayashi Aoi (artist)  
**今村 達紀 + 林 葵衣**

Oya Kazuyo (homemaker) + Tanaka Shusuke (artist)  
**大屋 和代 + 田中 秀介**

Kan Kaoru (artist) + Tanaka Kazuhito (artist)  
**菅 かおる + 田中 和人**

Kusui Saya (artist) + Kurokawa Gaku (artist)  
**楠井 沙耶 + 黒川 岳**

Konishi Keiko (artist) + Nishimura Ryo (artist)  
**小西 景子 + 西村 涼**

Masumoto Naho (Hozonshoku Lab) + Masumoto Yasuto (artist)  
**増本 奈穂 + 増本 泰斗**

curation Kaoru Kan + Kazuhito Tanaka  
本展キュレーション:菅 かおる + 田中 和人

organaized by soda + Gallery PARC  
主催:soda + Gallery PARC



SNS ↑

## NEW INTIMACIES

ニュー・インティマシー

Institutions, exhibitions, publications, and art criticism – the various mechanisms of the art world - all revolve around the individual style of the singular artist. The relationships between the artist and his/her peers seems to remain in the background. Questions arise. How could we know if two artists sharing a studio influence each other? How could their ideas emerge out of discussions at the dinner table? Or how could their perceptions be shaped by the mutual experience of traveling together?

This exhibition invites art couples. They are artists, gallerists, and curators. Many of the couples don't collaborate regularly. Yes, they love each other, but they sometimes criticize each other too. In some occasions, they must compromise their wills for one another. They might even break up in the future. There's so much complexity to a love relationship - what kind of particular "intimacy" could we locate between them?

Today, we know what is happening, and what is being discussed around the world because of internet and smart phones. We can participate in the highly personal event of a friend who is far away as if it is happening right in front of our eyes. The relationships between people occur on a global scale, but "intimacy" is still a primal currency.

The "intimacy" of two which is developed by spending everyday together. The "intimacy" of two as a result of emotional quarrel. The "intimacy" of communication behind the technological advancement. The "intimacy" of the struggle to understand your partner's thought and art practice. This exhibition focuses on such exchanges between couples. The exhibition asks each couple to make artwork as a collaboration.

A couple is a small unit, but its complexities exist in the history and emotional landscape of the relationship. Their artwork could claim a new standard in today's highly speed information society. The couples will present unexpected values in this exhibition, and make them available toward the public. The possibilities of "new intimacies" are coming. It's embarrassing to call this "love", but this exhibition will discover it at last.

普段、アートの世界では、作家性という「個人」を軸とした、美術館での個展、モノグラフ、批評もしくは論考が展開されている。

ここではアーティストと他者との関係性は、脚注に留まる。では、スタジオをシェアしている仲間の作品の無意識な相互影響、食事の時に会話したあるアイデア、一緒に訪れた特別な場所での共通の体験などは、いったいどう作品に記録されているのだろう。

この展覧会は、アーティスト、またはアートに深く関わるカップルを招待する。彼ら、彼女らは、必ずしも常にコラボレーションをする間柄ではない。そこでは批判もあるだろうし、妥協もあるかもしれない。棲み分けのようなものもあるかも知れない。ある時、その関係は何かしら終わりを迎える可能性もなくはない。

でもそこにある「親密さ」とは何か？

現代の社会では、テクノロジーの進化や、インターネット、スマホの普及により、どこで今、何が起っていて、何が話されているのか、私達はほとんど瞬時に知る事が出来るし、遠くの知人の極めてパーソナルな出来事をあたかも身近な事のように共有できる。人と人との関係は世界規模に拡大したけれど、やはりここでは「親密さ」が通貨となっている。

感情の衝突や、日常性を通して育まれた「親密さ」、テクノロジー・コミュニケーションを介した「親密さ」、相手の作品を理解しようと、通常の鑑賞者以上の努力や好奇心の果ての「親密さ」。このような「親密さ」を通過してアートという価値を共有している(かに思える)自らのパートナーにこの展覧会は焦点をあてる。

そしてここでは、出来るならば、カップルとして共同の作業の中で作品を制作していただきたい。カップルは、小さな単位ではあるが、そこには、複雑な関係性が時間軸と感情の軸の中に存在している。その作品は、現代の超高度情報社会において、新たな「親密さ」として通常化するだろう。

文字通り「親密すぎる」関係であるカップルが、展覧会を通じて新鮮な価値を提示し、パブリックな場で交差させることで、ひとつの可能性を開くことができるのではないだろうか。「愛」と呼んだら大げさだが、私達は「New Intimacies/ニュー・インティマシー」を通じてそれを探求する。

本展キュレーション:菅 かおる(soda) + 田中 和人(soda)

Atsuchi Tomoko (artist) + Yamashita Kohei (artist)

**厚地 朋子 + 山下 耕平**

## 山A Mountain A

2022 / 庵治石 / 340×230×180mm

2022 / Aji stone / 340×230×180mm

330,000 yen (tax in) \*台座込み、送料別

これからわたしたちは、石と関係の深い地域での暮らしを始めます。

今展キュレーターである田中和人さんから声をかけていただいた時、真っ先に思い浮かべたモノが「私たちの庭のための彫刻」でした。そして、それは石であらねばならなかったのです。実は、庭に石彫があったらいいなと言い始めてからもう数ヶ月が経ちます。それがまさかこのような形につながるとは思ってもいなかったので、本当に面白いです。毎日のささいな出来事、意識しない、なんの変哲もない、ふいに発した言葉や会話が、いつか何かの形になる。点と点が繋がるような、偶然の必然。日常にはそのような種が日々蒔かれているのだと思います。

この石の形は、涸沢(からさわ)カールと呼ばれる氷河によって削られ生まれた山の風景です。その景色をそれぞれが思い出しながら、また想像で補完しながら、時には相談しながら、少しずつ彫り進めました。石彫のイロハのイの字も知らないわたしたちの前には、当然のごとく想定外が起ります。ジャンルは違えど、これまでの経験を駆使し、試行錯誤を繰り返しながらの作業となりました。

石彫と呼べる代物ではないかもしれませんが、この作品がわたしたちの庭に置かれ、長い時間とともに、どんな形や色に変わっていくのか、今から楽しみにしています。

Imamura Tatsunori (dancer) + Hayashi Aoi (artist)

**今村 達紀 + 林 葵衣**

## うつしみたどる No.001 reflection and refraction No.001

2022 / 口紅 / サイズ可変

2022 / lipstick / variable

ask

## うつしみたどる No.002 reflection and refraction No.002

2022 / 口紅 / 225×312×32mm

2022 / lipstick / 225×312×32mm

55,000 yen (tax in) \*送料別

《うつしみたどる|reflection and refraction》は、呼吸の止まった先でどう踊るのか考える“無呼吸”や、祖先の記憶と生と死にまつわる“もけもけしたもののがはみ出してくる”などの作品を制作する今村

達紀と、反復行為によるずれや音声の保存、ままならない身体やふるまいの記録をテーマに作品を制作する林葵衣の2名が、刻々と変化する水面の反射・屈折・流れの形を確かめるように「自身がうつしみたものをたどり再生する」プロジェクト作品。

林葵衣が口紅を塗った唇で発話をおこなったものを、発話を聞かずに今村達紀が唇の形を読み取りトレースすることにより、音を介さず形を使って発話を解読することを試みる。

言葉はどれだけ丁寧に見聞きしても誤読が生まれる。発声された言葉は誤読を含めた微細なズレを生じさせながら反復される。

そのズレや誤読は、時間とともに川を流れる水面の形が変わっていくように、言葉の形や音の形が変わっていくことを可視化する。


**Oya Kazuyo** (homemaker) + **Tanaka Shusuke** (artist)

## 大屋 和代 + 田中 秀介

### 無縁結びrelation to irrelevance

2022／木製パネル・蝋・枯れ木・紙・石・金属・陶器・アクリル絵の具・油絵の具／φ395mm

2022 / wood panel, wax, dead tree, paper, stone, metal, ceramic, acrylic paint, oil paint, / φ395mm

55,000 yen (tax in)   \*送料別

息つく間もない日々の暮らしの中に突如本展のお誘いが届く。

私は、体は動いているが固まった。

何をどの様にし、また時間をどう作るのか。

一瞬でこれから起こり得る事態を察し、おののいた。知らせを聞いた妻も同じだったと思う。

この時点、大変である事しか想像出来ていない二人だが、定めを受け入れる様に出展を受諾する。

この時、期待から来るものなのか、少し温かい、爽やかなものが体を通した。いつかは忘れたが、それはこれまでも覚えがある。

私は妻の家事の合間に、刺し入れる様に案を述べる。が、娘の粗相に打ち消され、慌てて二人で床を拭く。

その様な時間を繰り返し、案は更新され、いよいよ実体化させる所まで到達した。

一つ完成された作品イメージをお互い共有した気になっているが、これまで扱ってきた素材の違い、それに対する経験値の差からも、全く違うものをイメージしていただろう。

作品案として木製パネルを作成し(私)、蝋をひき、あらゆる物を配置し(妻)その配置された物の情報を絵に変換して一つにまとめ、得体の知れないものを蝋の上に描き込む(私)。というものである。

この案で良いのか悪いのかはわからないが、二人が今でできる限界であり、納得はしていたが、折衷案の様でもあり、悔しさが滲むものであった。

まあもう、うだうだ言っている間もなく制作に取り掛かる。

パネルを作り、蝋をひき、物を配置する。次に私が描き込む出番、作業場にて作品を覗く。蝋がひび割れまくっている。慌てて妻に述べに行く。述べた途端、二人は声を出して笑った。この突拍子もない、どうしようもない事態を望んでいたのだ、と自覚した。

改めて作品に出来たひび割れを見つめる。

これまでの暮らしも、お互いの案をかち合わせ、その中突拍子もない、どうしようもない事態に陥り、驚き、喜び、解決策として受け取り、次に暮らし行く為の成果としてきた。

このひび割れは二人にとって大切で、喜ばしいもので、紐を描き、縛って、囲って、示した。

お互い真に納得し、当初抱いた悔しさもさっぱり消えた。


**Kan Kaoru** (artist) + **Tanaka Kazuhito** (artist)

## 菅 かおる + 田中 和人

## Smile painting #1

2022／キャンバスにアクリル、クレヨン、木炭／1167×803mm, 1167×803mm (2点組)

2022 / Acrylic, crayon and charcoal on canvas / 1167×803mm, 1167×803mm(Diptych)

850,000 yen (+tax)   \*送料別

## Smile painting #2

2022／キャンバスにアクリル、クレヨン、木炭／333x242mm, 333x242mm (2点組)

2022 / Acrylic, crayon and charcoal on canvas / 333×242mm, 333×242mm(Dip-tych)

250,000 yen(+ tax)   \*送料別

菅 かおる + 田中 和人「Smile painting #1」2022年

わたしたちは、この展覧会のために、希望に満ちた明るい未来を描きたいと思いました。カップルが仲良く二人乗り自転車を漕いでいます。

極度に単純化された二人の姿はほのぼのとして、その顔は幸せに満ちてニコニコです。しかし、二人の体に目を向けると、不穏な世界が広がっています。そこには、私たちの身の回りに起こる地球環境の悪化、天変地異から来る洪水、噴火、豪雨、竜巻、山火事、干魃などの光景がコラージュされ描かれています。

それは、たった今起こっていることかもしれないし、未来を暗示しているようにも見えます。

これらの出来事はいつしか二人の笑顔を消してしまうかもしれません。あるいは、二人を引き裂いてしまうかもしれません。それでも、二人は笑顔で前に進むのでしょうか？

この二人は、わたしたちであり、この地球に生きる全ての人でもあります。

**Kusui Saya** (artist) + **Kurokawa Gaku** (artist)

## 楠井 沙耶 + 黒川 岳

## きっとこの先には海が・・・

**Surely the sea is just beyond...**

2022／シングルチャンネルビデオ、ステレオサウンド／2’39”

2022 / Single channel video, sound / 2’39”

50,000 yen (tax in),ed7   \*送料別

“親密さ”はこれまでいた 2 人きりの部屋から飛び出していこう。部屋では広げきれない大きな帆が、2 人を隔てながら、2 人を繋いでいる。

この大きく重たい帆を引きずり、掲げ、あてどなく進むとき。2 人の間を風が通り抜けてゆく。



**Konishi Keiko** (artist) + **Nishimura Ryo** (artist)

## 小西 景子 + 西村 涼

### 風景Landscape

風景1
2022／インクジェットプリント／500×728mm (イメージサイズ)
2022 / inkjet print / 500x728mm

99,000 yen (tax in),ed3   \*額別、送料別

風景4-7
2022／インクジェットプリント／392×553mm (イメージサイズ)
2022 / inkjet print / 392x553mm

77,000 yen (tax in),ed3   \*額別、送料別

(小西)
西村がしばらく不在になることは決まっていたので、分業になるような制作方法がいいと思い、写真のデータを渡して上から何かしらの描画をしないかと持ちかける。写真は日常的に撮り溜めたものの中から西村が普段使わなさそうな題材を選ぶ。

(西村)
それらの印刷した写真のイメージに草木の風景や植物、木の枝振りといったものを描き重ねた。そうする事で、写真のイメージが、再び静かに動き出すような感覚を加えようと試みた。また水や絵の具、パステル、ペンなどいくつかの描画材料を混ぜることで、最終的なイメージの見え方にどのような作用が働くか実験的に描画した。

(小西)
描画がされたものをスキャナにかけて再びデータ化し、引き伸ばして印刷する。

(小西・西村)
オンラインミーティングでお互いに案を出し合い、タイトルを付ける。

**Masumoto Naho** (Hozonshoku Lab) + **Masumoto Yasuto** (artist)

## 増本 奈穂 + 増本 泰斗

### 旬とパンと保存とアートと与太話Season, Bread, Keep, Art, Gossip

2022／レーザープリント／サイズ可変

2022 / laser print / variable

### サンドウィッチSandwich

2022.9.11／パンと季節の野菜など／手のひらサイズ
2022.9.11 / bread, vegetables / palm size


作品と呼ぶのは大層ですが、私たちは展覧会初日にサンドウィッチを配ります。パフォーマンスのようなものです。

増本泰斗がパンを作って、増本奈穂が中身を作ります。

数に限りがあるので、ごめんなさいの方もいるかもしれませんが、なるべく多くにお渡しできたらいいなあと思っています。

でも、タイミングが合わなくて渡せなかったとか、そもそもサンドウィッチは苦手とか、人から食べ物を貰うのはご時世的にちよっとの方もいらっしゃると思いますので、受け取らないのも大歓迎です。